

あの日夢見た青春を今

日向野Bell

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

クル・エルナ村の惨劇を経て数年。盗賊バクラはエジプトの隅に位置する村、ヒスナル村に居を構えていた。

☆基本は原作・アニメ遵守です。ですが間違いを犯す可能性大です。もし見つけましたら一声お掛けください。

架空デュエル&架空ディアハの書き方が良く解りません。ですので、教えて頂ける方

が居たら是非ともお願い致します。

アンチ発言・更新催促等は受付られません。

無断転載禁止・その他法に触れる行為もお控え下さい。

この小説は捏造・妄想により出来ております。史実等は全く参考にしておりません。
感想等お待ちしております!!

目次

第一章 精霊交信

第1話 始めよう。俺達だけの青春
を。

1

第2話

5

第一章 精霊交信

第1話 始めよう。俺達だけの青春を。

ガツガツとうすい腹に突き刺さる爪先が俺の心さえもずぐりと抉るのが解った。
つまらぬ感傷。

俺は存外、諦めの悪い男だったらしい。

他人が優しいなどと、まだ信じていたなんて。

「ぎやはははははははははははっ！まんまと騙されやがって!!!」

てめえみてえな薄汚え盗人のガキとの契約なんぞ守るわきやねえだろうよ!!!」

「ホントに地主の邸宅から財宝全部盗み出しやがって………なんて腕だ」

「お前が苦勞して盗んだお宝は、俺達が有効活用してやるよ!!へへへ、今日はちよつと高い女でも買おうかなあ」

声がする。聞き覚えがある——

これは、人の不幸を心の底から愉しんでいる奴の声だ。

「ははっ！ねえ、ソラさん」

「なんだよ、今良いトコロなのによお」

ぶちぶちっ！

無理矢理髪を鷲掴まれ顔を上げる。

「コイツ……キレイな顔してるだろ？」

背筋にひやり、と悪寒が走った。

「なんだよハナ。お前にそんな趣味あつたのかよ」

「一度ヤツてみたくてね。どんな具合なのか……知識欲つてヤツさ」

「知識欲、だあ？……お前意外と勤勉だなあ」

「それに、ほら！この子、紅眼に銀髪だよ？随分と珍しいよね。……唾付けときたくない

？」

脚を捕られる。熱くて動きの鈍い身体を叱咤して、必死で振り回す。

それだけは、いやだ。

俺は知っている。人の尊厳を根底から踏み躪るそれを。

両親が、友が、仲間が。見た事が無い程に醜悪な顔を晒して泣き叫ぶ光景。記憶の蓋が押し開けられる。

俺は、醜くなんてなりたくない。人である為に。

「……ッ………だッ ……やだッ お、れ、

う、おおおおおッ!! 離せッ!! 離せええええええええええええええええ!!」

声が、木霊した。

「離せだだよ、お前さん達」

バキイイイイイイイイ
!!!!!!

俺の頭上を、影が舞った。

衝撃から一步遅く、身体を丸める。ほんの少しだけ目を開けて周りを確認した。見えたのは、俺を掴んでいた方の男が伸された姿だった。

「……………?! ……?! は??」

それを視認した仲間の男が新たな声の主に飛びかかる。

「てめええええええええええ!!!」

ゴイン!!!

「……………」

「……………」

男の股に、小さな脚が挟まっていた。思わず俺は自らの股に手を翳して守る。

仲間の男がきゆうう…と苦しみながら倒れ込むのを、この惨状を起こした張本人がえ

らく大仰に仁王立ちをかまして見守っていた。

「まあ当然だな。人の貞操を許可無く奪おうとする奴はねじ切れちまえば良い」

そしてそいつは、すつ…と。何でもないかのように俺に手を差し出した。

「君、実はぼく、パン持つてるんだけどさ。一人じゃ食べ切れないから一緒に食べるよ」

太陽よりも眩しくて、いたずらな笑顔を湛えたその少女はまるで。

物語から飛び出したヒーローだった。

第2話

ずず………と地面を擦る音。慌てて振り向くと、最初に伸された男——ハナと言ったか。そいつが残った力を振り絞りこの場から去ろうとしていた。

「あいつ、まだ意識があんのか……」

「やべっ！仲間呼ばれる」

少女は俺に差し出した手で俺の手を素早く取り、握り締める。

「ええと、君は？」

俺の名前。過ぎした時間こそ僅かであったが、それでも俺を愛してくれた。大切にしてくれた両親から貰った形見とも言うべき俺の……。

「……俺は」

「………バクラだ！盗賊バクラ！」

この少女の笑顔に負けないくらい、精一杯シニカルに笑ってやった。

「盗賊！そりゃカツコイイな！宜しくバクラくん！」

「テメエは？」

「サラ……このエジプトで一番イケてるヒーローになる女だ！」

俺達は走り出した。暗闇が心を蝕むような路地裏から、限りない太陽をその身に受ける為に。

先程の路地裏からほんの少し行つた所——商店街を挟んだ通りにある廃屋に俺達は腰を落ち着けた。

「ほらよ」

ぼむ……と俺を助けた少女——サラは俺の掌にパンを置いた。そのパンはよくよく見ると汚れが付いており、作られてから何日か経つた物であることが伺えた。

「ダメエこれ……」

「さつきも言つたろ？パン有り過ぎてぼくじゃあ食べ切れんから食え」

「……そうかよ。有難く頂戴するぜ」

ここ数日、食う物にさえ困つていたのでこの申し出は天恵とも言えた。

がつがつとパンに勢い良く齧り付く俺をニヤつきながら眺めるサラの視線がどうにもむず痒くてそつぽを向く。

「……で。バクラくん。君…此処の人間じゃあねえだろ」

「…だったらなんだ？」

ぴり……………と空気が張り詰める。

「あつ、ご、こめん。そういうつもりじゃあなかつたんだ。悪い。……………ぼくが言いたかつたのは、此処ヒスナル村は治安の悪さで有名だつて事」

「…？」

そしてサラは俺を見分するように見遣つた。

「この村はエジプトの隅に位置してる。だから王宮の連中の目が届き難いんだ。よつて、人攫い・麻薬中毒者・人殺し……勿論盗賊もうじやうじや居座つてる。そんな魔境に村の実情を知らない余所者かつ珍しい容姿のガキがやってきたら……。解るだろ？ 格好の獲物だぜ。」

ぼくとしちやあ、君は今すぐ此処から立ち去るべきだと思ふがな」

予想すらしていなかつた答えだつた。サラは、俺を純粹に心配していただけ。心が、少し軽くなるのを俺はまるで他人事のように享受した。

サラの言い分は理解した。だが、俺にはこの村に用がある。

「……………心配してくれて有難うよ。だが、俺は此処でまだやり残した事がある」

「やり残した事？」

突然の事に頭が回らず、衝撃から足を捻り、すっ転ぶ。

ズダン!!

「て、テメエ……………っ」

「ぼくも連れてけ!一人じゃ行かせらんねえよっ」

「は…………?」

「だから、ぼくも行く!」

「なんで…」

そしてこの女は、俺が今一番言われたく無い核心を突いた。

「そりゃあ…君、色々無理してるだろ」

「……………だ、黙れ!!!!」

俺は逃げるようにこの場を去った。



数多の星座に見初められると思う程に、いつもよりも空が煌めく夜だった。連中の根城は村の中心部にあった。俺は少し離れた建物の上からそこを見下ろしていた。

星々の光を頼りに自らが書き上げた地図を確認する。

「……此処から侵入して……そして……」

「よっー!」

ビクッ!!

思わず地図を取り落とす。慌てて体制を立て直し、懐に忍ばせたナイフを後ろの声に向かって振り振り――

星明かりが照らした声の顔は、昼に見たどうにも忘れられない顔だった。すんでの所でナイフを止める。

「デメエ……なんで此処に居やがる」

「尾けてきた」

サラはへへ、と悪戯が成功した子供のようにならした。

なんでここまで俺に付き纏うのかとか言いたい事が沢山あったのだが、故郷が滅んでから久しく見ていなかった、微塵も悪意を孕まぬその笑顔が――俺には酷く眩しく

思えて、文句の悉くを忘れてしまったのだった。